



平成30年度特別展

みなかみ そうまのさき  
南相馬のさき

樹

県指定天然記念物「大悲山の大スギ」

2018年6月10日、第69回全国植樹祭の大会がここ南相馬市で開催の運びとなりました。今回の特別展ではこれを記念し、「南相馬の樹」をテーマとして、この地域のさまざまな時代に存在していた樹木とそこに住んでいた人びとの関わりや、この地域で守られてきた樹木天然記念物などについて紹介します。本展が、私たちの文化を支える樹木についての理解を深めるきっかけとなれば幸いです。

## 太古から続く樹と自然の営み

### ◎古生代—福島県最古の樹木化石—

南相馬市西部に分布する合ノ沢層（デボン紀後期：約3億8270万年～3億5890万年前）は、福島県最古の化石を産する地層で、腕足類をはじめとする海の生き物の化石を中心に、陸上植物としてリンボク（鱗木）の化石も見つかっています。リンボクは茎表面に鱗状に葉が落ちた跡が残っていることから名付けられたもので、古生代を代表する植物として知られています。



南相馬市の合ノ沢層から見つかったリンボク (*Leptophloicum*)  
(平宗雄氏所蔵)

### ◎中生代—恐竜時代のシダ・ソテツの森—

阿武隈高地東縁部、ちょうど常磐自動車道に沿って分布する「相馬中村層群」のうち、栃窪層・富沢層から植物化石が見つかります。特に栃窪層（ジュラ紀後期：約1億5500万年前）からは、シダ類やソテツ類・球果類などの裸子植物が多産し、新種のソテツ「ニルソニオクレイダス」が市内在住の平宗雄氏により2種類発見されています。



南相馬市の栃窪層からみつかった  
ソテツ類、ニルソニオクレイダス  
(*Nilssoniocladus*)  
左：*N. taira*  
右：*N. japonicus*

### ◎新生代—被子植物の多様化—

中生代ジュラ紀に登場したとされる被子植物は、白亜紀を経て新生代になると大きく多様化します。双葉断層の西側に分布する塩手層（中新世前期：約1800万年前）の時代は、暖帯～亜熱帯の気候とされ、クマシデ、ハシバミ、コナラ、カエデ、フウ、ブナなどの被子植物化石が見つかっています。



塩手層の葉化石（平宗雄氏所蔵）



向山層から産出した広葉樹の珪化木

# 南相馬に残る人と樹のかかわりの跡

## ◎縄文人の貯蔵穴から見つかった木の実

鹿島区の中才遺跡、鷺内遺跡からは、縄文時代（約3000年前）の木の実が穴から出土しています。この穴は水が湧くことから、木の実のアク抜きなどをしたり貯蔵を行っていたと考えられます。クルミ、クリ、ナラガシワ、トチなどさまざまな木の実があり、縄文人の木の実利用の多様さが明らかとなりました。



鷺内遺跡から見つかった木の実と木の実を磨りつぶす道具

## ◎縄文人の植物利用

縄文人は、身の回りの樹木や草本をたくみに利用していました。中才遺跡からはササを材料とした大型のカゴが出土しています。このカゴは葉を敷き詰めた穴の下面に敷かれており、穴に湧く水をろ過する際に再利用されたものと考えられます。縄文人の植物利用の知恵をうかがわせます。



中才遺跡から出土したカゴ

## ◎縄文人の植物等の加工技術

縄文時代の遺跡からは、木の実を磨りつぶす道具（すりいし、いしざら）が多く出土します。また、木を伐採する磨製石斧も出土することから、縄文人にとって、樹木や木の実の利用は生命線とも言えるでしょう。磨製石斧は、東北地方で鉄斧が普及する弥生時代の後半まで使われていたと考えられます。



弥生時代の磨製石斧  
(桜井A遺跡)

## ◎ 泉官衙遺跡の建物の柱

奈良・平安時代の郡役所の建物に用いられた柱で、地面に柱穴を掘って柱の根元を埋めて建てられた掘立柱建物の跡から出土しました。この柱はクリ材で、縄をかけて運ぶための加工が施されているものもあります。一般の民衆が堅穴住居で暮らしていた当時、巨大な柱が林立する郡役所のようすは、律令国家の権力の大きさを示すのに十分でした。



泉官衙遺跡から出土したクリ材の柱。左は縄をかけるための加工が施されている。

# 大切にしたい南相馬の樹木天然記念物

南相馬市には多くの天然記念物が指定されています。天然記念物はその土地の歴史を物語るシンボル、あるいは地域の自然の特色を知るために重要な存在です。

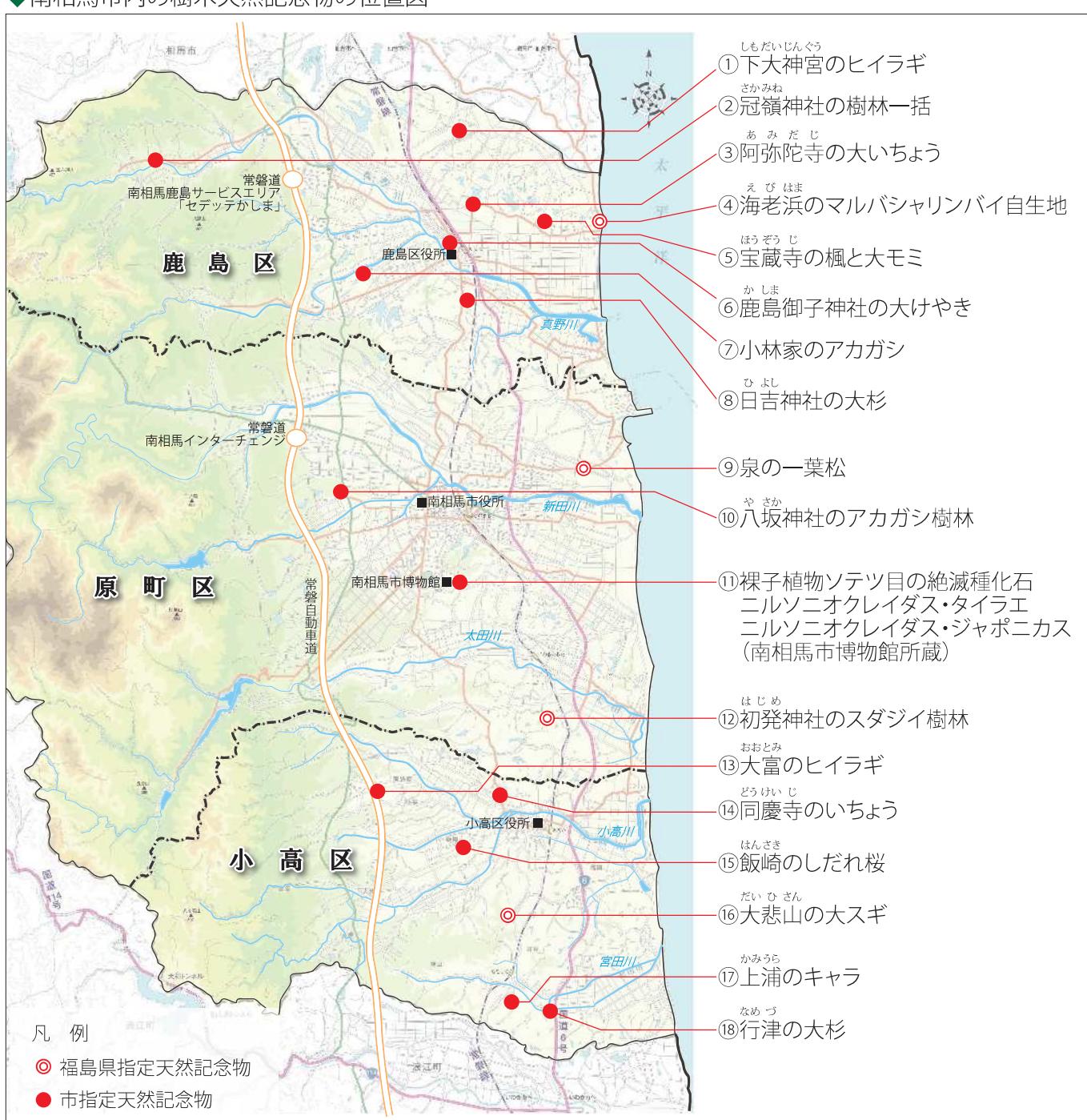
現在、市内にある県・市指定の天然記念物は、巨木・自生地・生息地・化石など20件にのぼり、うち18件が樹木に関するものです。私有地内にあるものもありますが、どれも南相馬市に住む人びとにとって大切な財産です。ぜひ各地の樹木を訪ねてみてください。

※私有地には所有者の許可なく立ち入らないでください。



泉の一葉松（⑨）（原町区泉字町池）

## ◆南相馬市内の樹木天然記念物の位置図





阿弥陀寺の大いちょう (③) (鹿島区南屋形字前畑)



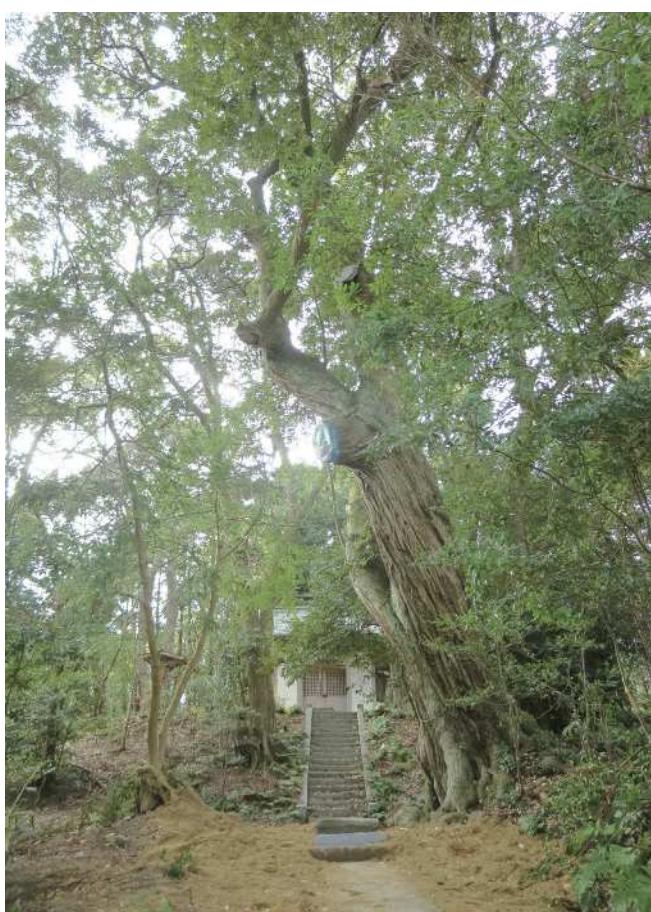
小林家のアカガシ (⑦) (鹿島区小池)



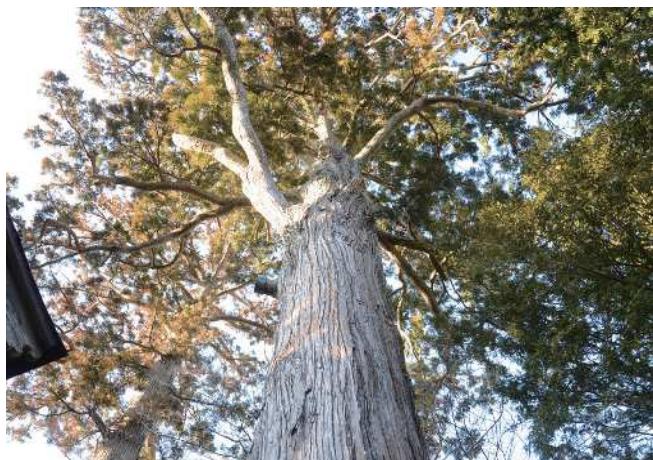
鹿島御子神社の大けやき (⑥) (鹿島区鹿島字町)



飯崎のしだれ桜 (⑯) (小高区飯崎字北久保)



初発神社のスダジイ樹林 (⑰) (原町区江井字西山)



行津の大杉 (⑱) (小高区行津字宮下 星神社)

# 震災によって変わった「樹」の景色

2011年に起きた東日本大震災による津波では、多くの尊い命と暮らしが失われましたが、同時に私たちの文化を支える自然とその景観も大きく様変わりしました。

## ◎海老浜のマルバシャリンバイ自生地

県指定天然記念物である鹿島区南海老のマルバシャリンバイ自生地は震災前には株が生い茂り、多くの花を咲かせていましたが、津波によって多くの株が流失し、自生地全体も大きく傷つきました。しかし、現在は生き残った群落が徐々に回復してきています。過去に幾度も自然災害を乗り越えてきたこの自生地の歴史が、いま目の前で再現されているかもしれません。



上：1996年6月撮影のマルバシャリンバイ群落（櫻井信夫氏撮影）  
下：2016年の同じ時期に撮影した群落

## ◎海辺に残った「かしまの一本松」

震災前、鹿島区南右田に存在した防潮林は津波によってすべてが破壊され、一本だけ生き残ったクロマツが「かしまの一本松」と呼ばれるようになりました。集落全体が壊滅したこの地区の人びとの心の拠りどころとなり、さまざまな手当てを施されました。しかし、しだいに弱っていき回復が望めないことや、新たな防災林の造成のため、2017年12月に伐採が行われました。



津波のあとに生き残った「かしまの一本松」と、その一部  
(左：2015年2月撮影 右：伐採後、南相馬市博物館にて保存)

## ◎震災後に指定解除「医徳寺のしだれ松」

原町区大甕の医徳寺に古くから生育したクロマツの大木で、その枝振りが下垂することから「しだれ松」の名で親しまれてきました。

震災後、樹勢が落ちたとみられることと、従来より不安視されていた倒木のおそれから、2016年1月に文化財指定を解除し、伐採に至りました。

博物館では、年輪資料としてこの木の一部を保存しています。





## ◎残された屋敷林（いぐね）の風景

「かしまの一本松」からやや陸側にもわずかに残された木々があります。それらは家の周りを囲って強風から守る屋敷林、または「いぐね」と呼ばれるものです。

津波によって住宅はなくなってしまいましたが、根を張っていた大きなタブノキといくつかの木が生き残りました。海岸から離れており、塩水の影響が弱かったためか現在でも現地で生育を続けています。地元のみなさんの声もあり、市によって現地での保存活用が検討されています。



屋敷林のうち、津波に流されず生き残ったタブノキ（鹿島区北右田）

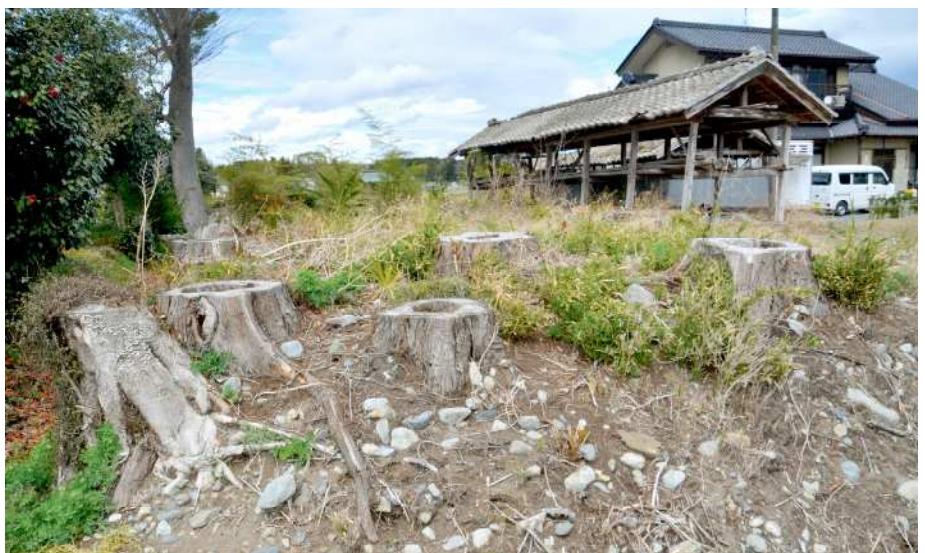
## ◎消えてしまった屋敷林の風景

震災によって消えてしまった屋敷林の風景もあります。屋敷林は防風林としての役割とともに、自家用建築材を確保しておく機能や、竹林があれば春のタケノコを収穫したり、ツバキがあれば種子油を搾ったりと、身近な有用林としての機能がありました。近年になって住宅の強度は改善され、生活様式にも変化が起きたため、防風の機能や建築材・燃料としての役割は小さくなっていました。

そうしたところに、原子力発電所の事故によって屋敷林の木々が放射性物質に汚染されました。それも屋敷林が減ったきっかけの一つだったと思われます。この地域の特徴的な「いぐね」の風景が失われつつあるのです。

家に居ながら四季の変化を感じられ、夏は涼しく、冬は寒風を和らげる屋敷林。自然環境との長い付き合いのなかで生まれた特有の景観を活かしつつ、その暮らしを守っていく方法はないのでしょうか。

原町区深野の個人宅  
震災後、ほどなくして屋敷周辺のスギやモウソウチクなどをすべて伐採した。以前から落ち葉やタケの勢いに手をやいていたが、実際に屋敷林を伐ってみると、強風で家屋が揺れすることが実感されるという。



# 太平洋側でも広がる

# 「ナラ枯れ」

「ナラ枯れ」という名前を聞いたことがありますか？ブナ科の樹木が夏季に急速に枯死する病気のことで、ここ何年かで福島県の太平洋側の森林でも被害が目立つようになってきています。

## ◎「ナラ枯れ」は伝染病

ナラ枯れは菌によって起きる伝染病です。名前の通りブナ科の植物のナラ類によくみられる病気ですが、シイやカシ類にも発生が見られます。

病原菌であるナラ菌を運ぶのはカシノナガキクイムシ（通称「カシナガ」）という甲虫で、木に穴をあけて内部に卵を産み、繁殖したナラ菌を幼虫がエサにして成長するという生態を持ちます。ナラ菌の繁殖によって木の通水部分が詰まり、夏場に木ごと枯れるという現象が起こります。

直径が30cm以上の木で特に発生が多くなるため、老齢林では被害が大きくなる傾向があります。

## ◎文化財も他人事ではない

市内にある天然記念物には、複数のブナ科の樹木が指定されています。ナラ枯れは高齢木に多く発生するため、今後も被害が起きないか注意が必要です。



南相馬市博物館の周辺でもナラ枯れは見られる。写真は昨年撮影したコナラのようす。「夏に突然茶色に枯れている」というのがナラ枯れの印象。



ナラ枯れの原因となるカシノナガキクイムシが入り込んだ穴。白い木くずが目立つ。この虫が運ぶナラ菌によって木が急速に枯死する。

# 歴史文化を活かしたまちづくり—歴史文化基本構想—

「南相馬市歴史文化基本構想」は樹木を含む自然や歴史・文化といった市の財産・遺産を活用した魅力的なまちづくりを目指したもので、市民のみなさんの意見をとりいれながら検討を重ね、今年3月に策定されました。

この構想の中には、津波を受けて傷ついた海老浜のマルバシャリンバイや北右田のタブノキ、かしまの一本松といった震災関連遺産、この地域にみられる屋敷林のある風景といった文化遺産、そして県指定天然記念物「泉の一葉松」とそれに関わる「泉の長者伝説」などの伝説、学術的に貴重なジュラ紀の植物化石など、樹木にまつわるものが多く盛り込まれています。

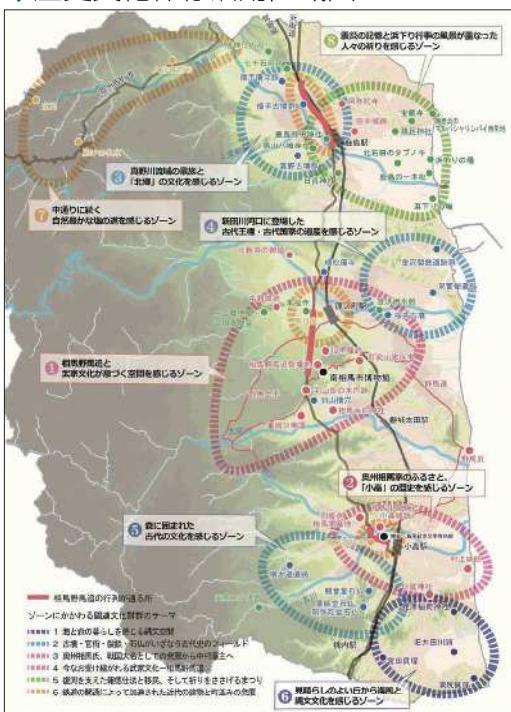
歴史文化基本構想はまだ出発したばかりです。今回紹介したもののほかにも「こんな遺産もあるよ」という市民のみなさんのたくさんのご意見をお待ちしています。

### 展示協力者および機関（敬称略）

【個人】 岩崎真幸、黒沢高秀、五賀和雄、小林吉久、櫻井信夫、佐藤みつ子、平 宗雄、寺田和雄、門馬勝義  
【団体・機関】 かしまの一本松を守る会、(株)箱崎林業、相馬地方森林組合、千葉製材所

平成30年4月27日 発行・編集／南相馬市博物館 印刷／(有)ライト印刷  
このパンフレットは平成30年度特別展「南相馬の樹」（平成30年4月28日～6月17日）のために作成しました。

### ◆歴史文化保存活用区域図



「【概要版】南相馬市歴史文化基本構想」より  
<http://www.city.minamisoma.lg.jp/index.cfm/8,39930,39,166.html>

## 南相馬市博物館

TEL 0244-23-6421 FAX 0244-24-6933

<http://www.city.minamisoma.lg.jp/index.cfm/24.html>

〒975-0051 福島県南相馬市原町区牛来字出口194番地